論文

非同盟運動の手前で
――ハ・ジン『戦争の屑』における朝鮮戦争と第三世界主義の萌芽

吉田　裕（東京理科大学）

「われわれが〔朝鮮戦争に参戦した〕口実は、朝鮮の侵略者たち〔朝鮮民主主義人民共和国〕がソ連を代表しているということであった。だが、このことは立証されたわけではない。中国もまた、この戦争の扇動者だと証明されたわけではない。[…] アメリカ合衆国だけが、このような内政動乱を第三次世界大戦の端緒にしようと前のめりになっているように思える。」

W・E・B・デュボイス[1]

1. はじめに

在米中国人作家ハ・ジンが英語で執筆した長編小説『戦争の屑』（2004）は、朝鮮戦争の連合国側の捕虜に焦点を当てつつ、収容場所であった朝鮮半島の南端にある巨済島での捕虜たちの運命を、中国の人民志願兵の視点から描いた作品である。[2] 英語圏では、朝鮮戦争の捕虜の視点から書かれた物語は、連合国側の語りに占められてきた。[3] それゆえ、連合国側の捕虜となった側からの物語は、それほど多く存在するわけではない。[4] ちなみに、合衆国においてながらく「忘れられた戦争」として名指されることの多かった朝鮮戦争が、2000年以降、ハリウッドその他の文化産業で比重の大きな扱いを受けつつある事態を、どのように考えたらよいのだろうか。[5] ひとつ言えるのは、2000年代半ば以降、米国が軍事外交政策の主要な対象地域を中東から東アジアへと転換したことにともなう、地政学的な変容と不可分であるということだ。この転換が明示されたのが、2011年10月、ヒラリー・クリントン国務長官（当時）が発表した政策「アメリカにとっての太平洋の世紀」である。アフリカをはじめとする他地域への中国の展開をふまえつつ、軍事的なリソースをアジア太平洋地域に集中することが明言された。[6]

『戦争の屑』刊行後の評では、合衆国のイラクおよびアフガニスタンへの侵略戦争による捕虜を勾留していたグアンタナモ湾収容所とアブ・グレイブ収容所での米兵の所業が想起された。[7] こうした評価からすれば、この作品は、アメリカによる上記地域への攻撃およびその後の軍事占領を、

第二次世界大戦後の日本の占領政策の「成功」を引き合いに出すことで正当化しようとしてきた政策立案者たちの言説への介入とみなすこともできる。[8] 同時に、『戦争の屑』は、収容所からの生還という物語を通じて、モデル・マイノリティ（翼賛型少数者）としてのリベラルな主体の形成を描く点で、合衆国の帝国的展開への同意であるという読解もなされてきた。[9]

本稿では、以上のような従来の解釈に同意しつつも、本書で部分的に展開される第三世界主義的な契機に注目する。上記エピグラフは、アメリカの朝鮮戦争参戦直後に、パン・アフリカニストのW・E・B・デュボイスが書いたある手紙からの引用である。デュボイスが示唆するとおり、アジア・アフリカを利用した戦争が、それ自体で第三世界主義の萌芽となることはない。[10] 本稿で言及する第三世界は、ヴィジャイ・プラシャドの言う「プロジェクトとしての第三世界」に近い。プラシャドによれば、バンドン会議以降本格化する第三世界主義とは、「国際主義の精神であり、他の植民地闘争を戦う人びとを同志とみなすような外側に開かれた視座」である。それは、「政治の舞台が創造される過程」にほかならない。[11] 反植民地闘争を共通の基盤としつつも、外側に開くことが難しい戦争および収容状態のなかで、どれほどこうした試みが可能なのだろうか。ここでは、『戦争の屑』をプラシャドの述べるような反植民地闘争と国際連帯の歴史のなかで考察する。以下では、作品内で焦点となる捕虜の身分をめぐる問いを整理しながら、とりわけ黒人兵の役割に注目する。

2. 『戦争の屑』の描く朝鮮戦争

小説は語り手であり主人公であるユ・ユーアーンがアトランタにて息子一家の家に滞在している場面から始まる。現在73歳になる彼は中国にこれから帰るところだが、英語で回想録を書こうとしている。ユーアーンは四川省成都出身で、かつて広州にあった国民党の陸軍軍官学校に通っていた。国共内戦ののち、朝鮮戦争に人民志願兵として参加したユーアーンは、上官のペイ・シャン人民委員、それにチャオリンらとともに、連合軍の攻撃にあう。気を失い、大腿骨損傷という大怪我を負うも、捕虜として巨済島に送られる。後に連合国の軍医である中国系アメリカ人医師による手術とリハビリのおかげで、歩行できるまでに回復する。英語に堪能であった彼は、通訳として、人民志願兵側だけでなく、国民党側にも協力を求められる。

1951年7月、朝鮮戦争の休戦協定以後に始まった交渉において、捕虜の扱いが中心的な議題となった。朝鮮戦争が長引いた要因のひとつと言われる。すなわち、捕虜の即時本国帰還をうたった1949年のジュネーヴ条約に則り、本国送還を許可するか否かということだ。[12]

しかし、国民党兵士が多く入っている収容所に帰属していたユーアーンにとってはこの状況は恐怖を意味した。大陸への帰還を希望する捕虜には国民党将校のリュー・タイアンが、見せしめのための拷問や暴力を用いることで、公然と脅迫を行う。さらに、友人であったはずのバイ・ダジアンが国民党側に寝返った結果、ユーアーンの下腹に“FUCK COMMUNISM”と刺青を入れられる。周知の通り、東アジア圏において刺青は、社会的なしるしとして罪人や奴隷を意味する。[13] この刺青が、共産圏と資本主義圏のあいだで翻弄される無垢な民としての主人公の命運を象徴する。

3. 巨済島と「非強制的」本国送還

ちなみに、中国が朝鮮戦争に参戦した理由としてしばしば述べられるのが、朝鮮義勇軍が抗日戦線に参加したことの見返りであるとする「互恵主義」という論点である。[14] 朝鮮戦争に参加した人民志願兵のうち、約3分の2が元国民党兵士であった。[15] 作者ハ・ジンの父親も、捕虜とはなら

なかったものの、人民志願兵の一員として朝鮮戦争に参戦した。[16] 歴史家のブルース・カミングスによれば、1955年のアジア・アフリカ会議（バンドン会議）で証明されたように、中国が国際的地位を高めることになったのは、朝鮮戦争で「アメリカと戦って休戦にまで持ち込んだことに負うところが大きい」。[17] 中国と朝鮮民主主義人民共和国の側から見たとき、両者が抗日戦線を通して築き上げた関係性が、朝鮮戦争後にはより強固なものになったのである。

これと対をなすのが、収容所という空間が果たしてきた機能である。帝国日本による植民地支配から米軍による軍事占領をへて、米国が東アジアで協調的な同盟国を立ち上げていくプロセスが刻まれている。[18] 一つめに、巨済島がそもそも連合国側の捕虜の収容所となった過程である。まずは、アジア太平洋戦争のさなか、日本軍が米軍の捕虜の収容場所としていたことに由来する。規模が拡大したのは、1951年の1月以後である。元来、島民の多くは水耕や漁業を生業としており、解放後は土地改革を支持していた。そのため、米軍によって共産主義に対して親和的であるとみなされた。1260戸にもわたる家や建物を破壊し、1680エーカーもの土地を接収して、収容所を建設した。[19]

二つめに、帝国日本の支配とそれへの抵抗の痕跡である。『戦争の屑』で明記されているように、国民党兵士による捕虜への拷問の所作や慣習は、帝国日本の警察軍隊組織から引き継がれたものである（85）。さらに、巨済島で米軍将校フランシス・ドットを人質とする事件が起こる。戦時捕虜に与えられる食事や衛生状況の改善要求が受け入れられなかったことに抗議して起こった事件だ。小説では、米軍将校の誘拐をユーアーンおよびチャオリンに指示するのは、共和国の兵士で、抗日運動にも参加したパク氏である（172–173）。人民志願兵からみれば、あくまで交渉のための捨て駒としてではなく、自分たちの存在を党の中枢部にアピールするための行動として描かれる。人質を盾にした反乱が鎮圧されたのち、人民志願兵たちは済州島へ送られる。

三つめの論点として、捕虜が心理戦の主要な標的でもあったことが挙げられる。[20] 米軍が日本の敗戦後に駐留を開始して以後、対敵諜報部隊（CIC）をはじめ、朝鮮人スパイを用いながらの情報戦は半ば公然と行われていた。当時から、人びとには、日本の憲兵隊と同じような役割であると思われていた。[21] 合衆国の国家安全保障会議決議81/1（1950年9月9日発布）では、米国が朝鮮戦争に参戦するにあたっての重要な動機付けとして、朝鮮半島の人びとの米軍への敵意を共産主義へと方向づけるためであると明記されている。[22] そして実際、この政策に則って、捕虜への再教育プログラムも計画された。ちなみに、1951年の春から実行されたこの再教育プログラムを担当したのは、米軍の民間情報教育部門（CIE）と呼ばれるセクションである。この部門は第二次世界大戦後、日本での心理的な教育支配プログラムを担当した。[23]

四つめは、二つめと関連するが、日本の領域内の入国者収容所との連動である。米軍が朝鮮戦争に参戦して約一ヶ月後につくられた大村収容所では、国境管理と反共主義を名目として、周知の通り、人種化および暴力の行使が公然かつ隠然となされていた。[24] 以上のような歴史的・政治的背景に鑑みれば、日本の植民地支配から米軍の軍事支配への移行をしるしづける結節点として、巨済島という空間および捕虜の身体がある。

捕虜の扱いには、朝鮮戦争特有の事情も反映されている。中国軍は、捕虜となった連合国の兵士たちに対して、「寛容政策」と呼ばれる手厚い扱いをしたことで知られる。すなわち、敵兵として非人間的な扱いをするのではなく、手厚い保護を施すことで共産主義への敵意を削ごうとした。連合国側の捕虜をめぐっては、その対となるような形で、思想戦が戦われていた。その最たるものが、捕虜の送還をめぐるコンフリクトである。

合衆国をはじめとする連合国側は、「自由意志に基づく（強制的でない）送還」にこだわった。

本来なら捕虜は、自らの帰還先を自国、敵国、第三国から自由にえらぶことができる。そのため、自由意志が優先されなければならない。しかし、連合国側としては、共産主義が「自由」や「民主主義」といった自らが体現する理想と対極的であることを世界に喧伝しなければならない手前、あまりに多くの捕虜たちが自国（すなわち中国と朝鮮民主主義人民共和国）への帰還を望んでは面子にかかわる。そのため、実際には精神的・身体的な脅迫や拷問が行われていた。[25] たとえば、『戦争の屑』で描かれるのは、刺青を強制されながらも、本国帰還を望んだ人民志願兵の皮膚の肉を、国民党将校がナイフで削りとり、火で炙り、自らの口に入れるという残忍な場面である。

> リュー・タイアンは、その男の肌から切り取ったばかりの肉片をひらひらさせ、もう片方の手で側近のひとりが手にしていた灯油ランプのガラスケースを開けた。肉片を炎に掲げて炙り、数秒のあいだジリジリと焼くと、焦げて黄色になった。それを口に運ぶと獰猛なまでにたいらげた。（111–112）

これに類似した事例は、中国と共和国によって非難されてきたものの、合衆国および国連軍は、自らの行いを正当化する理由として、中国と共和国がジュネーブ条約に調印していないことを持ち出した。それゆえ、『戦争の屑』では、連合国側の提示した「非強制」と「自由意志」という文言が、現実を糊塗する遮蔽幕としてどのような用いられ方をしたのかが、克明に描かれる。身体的・精神的な自由が奪われた状況で、唯一自由が存在するのが、この作品によれば、書物への没入なのである。

4. 通訳と英語の役割

『戦争の屑』では、ユ・ユーアーンという英語に堪能な焦点人物を通して、人民志願兵が英語圏文化に習熟する過程が描かれる。軍の学校で学んだ英語の能力が、生き延びるための手段となる。実際、朝鮮戦争に参加した文学者のなかには、この作品の主人公と同様に、通訳として働いていた者もいる。[26] では、通訳という立場は、植民地支配においてどのような役割を果たしてきたのだろうか。また、英語という言語はとりわけ米軍占領以後の朝鮮半島の歴史のなかで、どのような意味を持ってきたのか。

通訳は、植民地支配を強化し、分断や軋轢を引き起こす媒介者および協力者として動員させられてきた。統治を強化する過程に同伴することで、統治に同意を与える存在である。そもそも、朝鮮総督府は、官僚的・行政的な面から日本の植民地支配を行うために、日常業務として通訳や翻訳をこなす膨大な数の役人を必要とした。[27] たとえば、日本が朝鮮半島の支配を拡大強化する過程で土地調査事業が重要な役割を担った。その際、測量の調査班を構成していたのは、「武装した警察官と朝鮮人通訳各一人、並びにその地方の有力な朝鮮人地主に伴われた技師たち」であった。[28] 三・一独立運動以後、総督府は抗日運動の弾圧強化にあたって、日本人警察に朝鮮語学習を奨励し、日本人警察官の通訳の総数を増やそうとした。その背景には、それまで通訳の役割を果たすことの多かった朝鮮人警察官への猜疑心があった。[29] 作家の金史良は短編小説「草深し」（1940）にて、1937年以来、総督府によって施行された色衣政策を批判的に描く。中学校教師の「鼻かみ先生」は、色衣奨励を人びとに説く郡守の日本語を朝鮮語に翻訳する通訳であるだけでなく、人びとの白衣に墨でしるしをつける行為にも協力を強いられる。[30] また、通訳は分断にまきこまれながら、支配過程を観察し、目撃者として報告する存在でもある。済州島四・三事件を多くの作品で題材とする在日朝鮮人作家の金石範が中編小説「鴉の死」（1957）で主人公とする丁基俊（ジョン・キジュン）も、やはり米軍の通訳であり、パルチザンの内通者でもあ

る。このように、為政者の側に立ち住民を裏切りながらも、後ろめたさをかかえた目撃者として、通訳という職業がしばしば配置されることがある。[31] 帝国日本の支配期そして米軍占領期における通訳は、統治の媒介者であると同時に、統治下の民衆の不安や恥辱が投影される存在なのだ。

日本の植民地支配が終焉して以後、英語という言語は、知と権力の方向性を統合・集中させることで、日本の支配から米国による軍事占領への移行を容易にしてきた。それまでは、日本語による行政文書が統治の記録の中心を占めてきたが、米軍がやってきてからは、軍事統治における命令系統や行政的な文書記録が英語を介して行われるようになった。1945年12月、将校たちのための軍事英語学校が設立される。翌年6月には朝鮮警備士官学校が組織された。[32] 国防警備隊の資格は、米軍政によって資格が狭められ、「日本による投獄経歴を持たない者に限ると規定したために、国内外で抗日抵抗運動にかかわった朝鮮人は排除されてしまった」。[33] ここから国防警備隊が組織され、のちに韓国国軍のエリートが輩出される。この学校の出身者には、丁一権（チョン・イルグォン）がいる。満州国軍の大尉であり、戦後は国防警備隊総参謀長となり、首相にまでなった。のちの大統領朴正熙や彼を暗殺した金載圭（キム・ジェギュ）なども輩出した。帝国日本の軍隊が、韓国の軍隊へと移行するきっかけとして、英語軍事学校があった。

もちろんのこと、中国の場合は英語が支配言語ではない。そのため、独立以後の韓国のように、英語が軍事および行政をつかさどることはなかった。とはいえ、『戦争の屑』の描く通訳は、政治的に無垢ではありえない。巨済島の連合国側の英語通訳は、「基本的に捕虜と捕虜監視者、あるいは中・朝人民軍とアメリカ軍の意思を伝達する媒介者でもあり、（略）わが身を守るために意思疎通を遮断する裏切り者でもあった」からだ。[34] たとえば、ユーアーンは自身、収容所内で何度も共産党に加入する機会がありながら、結局、入党することはない。それどころか、収容所内での党組織に参加を断られる。その理由が、牧師が人びとに教える聖歌の歌詞を英語から中国語に翻訳することができること、そして聖書をひとりで読んでいるということであった（122）。その際、彼が自らに納得させるように言い聞かせる理由が、通訳という立場によって装われる「中立性」である。それゆえユーアーンは、支配者への協力を強いられる通訳という立場のために、後ろめたさを感じることはない。むしろ、おなじ人民志願兵がマルクス主義へ帰依する様を「宗教的な感情」である、「非常に狂信的に大義に身を捧げている」と相対化する（128）。朝鮮戦争時の連合国側捕虜という立場のために巻き込まれるはずの思想的・政治的な対立から距離を置くための装置として、英語運用能力および通訳という職業が配置されている。

5. 争点としての黒人兵——第三世界主義前夜

映画などの映像メディアに加え、新聞や雑誌、小説などの活字メディアは、収容所内での国連軍の再教育プログラムにて中心となる役割を果たした。小説内でも、民間情報教育局（CIE）のことが言及される（297）。作品の後半部、英語で書かれた雑誌や書物に触れるなか、主人公は、聖書およびキリスト教への没入を深める。

> 読む速度が増した。いまや、一時間に聖書を十ページ読むことができた。そのように進むのはとても気分がよかった。新しい単語すべてに鉛筆でしるしをつけ、あとで意味を調べた。直感的に、英語を運用する能力が身を助けるだろうと思ったので、一生懸命にとりくんだ。（300）

プログラムでは、合衆国において、黒人をはじめとした民族的少数者に寛容であることが喧伝された。より広い文脈から見れば、19世紀後半以後の合衆国の世界認識である「明白なる運命（マニフェスト・ディスティニー）」と

その背後にあるキリスト教の伝道という使命に沿って展開した。[35]『戦争の屑』の主要なプロットも例外ではない。

とはいえ、再教育プログラムとは無関係に、主人公はアメリカ文学の古典を自ら携えて読む。本を読み、翻訳し、解釈を共有するという行為が、同じ立場にある兵士たちとのコミュニケーションを図るためだけでなく、敵兵との会話にも役立つものとして描かれる。鴨緑江を越えて、人民志願兵が戦闘に参加して以後、休憩や野営の際に主人公が読む本は、ハリエット・ビーチャー・ストウ『アンクル・トムの小屋』（1852）である。同書は刊行後ベストセラーになり、南北戦争時には、奴隷解放を掲げていた北部に勢いを与えた。反奴隷制度の立場をとりながら、白人の人種差別が刻まれた書物であり、作者のキリスト教精神に彩られた作品でもある。[36] 主人公は、同書から一部を翻訳して読み上げ、同僚の兵士たちを楽しませる。以下では、義勇軍の兵士であることと奴隷であることが、重ね合わせられている。

> 彼らに『アンクル・トムの小屋』からいくつかの挿話を語って聞かせた。なかには、登場人物のキャシーに感動した者もいる。彼女は赤ん坊の息子をアヘン・チンキで毒殺し、奴隷として売られてしまうのを阻止したのだった。アメリカの奴隷主は古代中国の地主よりも残酷に違いない、みなはそう考えた。しかし、奴隷でも豚の臓物や豆、ビスケットやチキンなどを口にすることができるということに驚嘆していた。私は、クロエおばさんが奴隷のサムにご馳走を出す場面を翻訳した。イライザと彼女の息子のハリーが奴隷商人につかまらないようにオハイオ河の向こう岸へと逃れることができたという吉報を、サムがクロエおばさんに伝えた後のことだ。（37）

奴隷として売られるよりも子供を毒殺するというエピソードが、義勇軍の兵士を感動させたとするならば、その感動は、捕虜として捕まることが恥辱にほかならないという教えを内面化している兵士たちと、我が子を思うあまり手にかける奴隷の親が、重なってしまうからである。とはいえ、そのような観点から見たとしても、合衆国において奴隷主であることは、古代中国の地主よりも残虐きわまりない。人民志願兵が逃亡する黒人奴隷へ共感する様子が、明示的に現れた場面である。

捕虜として巨済島の収容所に入れられてからの主人公の役割は、米軍の『星条旗新聞*Stars and the Stripes*』の古い号を譲り受け、上官のペイ・シャンに翻訳して読み上げるということであった。比較的規則の厳しくない収容所へと移動してから、彼は二人の黒人兵に出会う。ひとりは、肌の色が明るく、中国語を少し理解する。捕虜たちから軽口をたたかれたり、ときには侮蔑的な言葉づかいをされたりしても、笑顔で応える。もうひとりは、縮れ髪の骨張った長身の兵士でルイジアナ出身である。彼に『アンクル・トムの小屋』のことを尋ねるが、知らないと言われ、ユーアーンは驚く。さらに、同書で描かれるように、毎日鶏肉を食べるなど豊かな食事をしているのかと尋ね、食べ物についての会話で盛り上がる。ユーアーンは、反奴隷制の立場から描いた映画『船いっぱいの奴隷たち*A Shipload of Slaves*』についても尋ねるが、やはり知らないと言われてしまう（140）。しかし、志願兵は黒人兵にとってあくまで敵兵であって、一方的に同一化しうる存在ばかりでもない。上官の命令に従順で、利己的に行動する世俗的な存在としても描かれる（213）。こうして、人民志願兵からみたアメリカの黒人兵へのまなざしは、期待から失望へという道筋をたどる。

とはいえ、実際のところ、合衆国の黒人の知識人および民衆は、中国での革命や朝鮮戦争へのアメリカの参戦をどのように評価したのだろうか。アフリカ系アメリカ人によるメディアは、朝鮮戦争そのものが別の有色人種の自己決定権を否定するものであるという論陣を張った。[37] ハーレムだけに限っても、徴兵忌避の割合は三割にのぼっ

た。さらに、マルクス主義者でパン・アフリカニストのポール・ロブスンやデュボイスは、犀利な現状分析を行いつつ、朝鮮戦争へのアメリカの参戦を批判した。[38] ロブスンは、朝鮮戦争のみならず、ベトナムや台湾、フィリピンへの合衆国の介入についても言及し、その上で、南アフリカの人種隔離政策に抗議するデモ行進への賛同を示した。[39] ロブスンが南アのアパルトヘイトに言及したことは、理由のないことではない。合衆国が朝鮮戦争に参戦したのは、アパルトヘイトの法的な諸制度が整備された時期に重なる。また、人種隔離政策を是とする南アフリカが核兵器の原料となるウランを合衆国に提供することで、朝鮮戦争中に中国や朝鮮半島へ核兵器を使用することが担保されていた。[40] このような軍事的・物質的な供給ルートが担保されていたために、合衆国は核兵器の使用を念頭に置くことが可能だった。ロブスンとデュボイスのふたりは、1955年、インドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議、翌年の56年にパリで開かれた黒人作家芸術家会議に参加を希望していたが、合衆国がビザを発行することを拒んだために、渡航が叶わなかった。[41] また、59年、デュボイスは配偶者のシャーリー・グレアム・デュボイスとともに北京を訪れ、毛沢東や鄧小平に会っている。

実際に朝鮮戦争に参加した黒人兵たちは、かつての被植民地である朝鮮半島や中国の兵士たちに出会うことで、社会主義の経験が別の位相の変化をもたらした。朝鮮戦争の連合国兵士を扱う際、人民志願兵は、黒人兵らを被抑圧民族としてとらえ、他の米兵とは別の収容所に入れた。他方、捕虜の米兵たちのなかには、収容所内でも、クー・クラックス・クランなど白人至上主義を奉ずる反共集団を立ち上げる者もいた。[42] 朝鮮戦争後には、捕虜の黒人兵らが人民志願兵に協力しようとしたとの主張を繰り広げて、合衆国内で黒人帰還兵らへの差別を扇動しようとした。[43] 以上のように、黒人兵は、中国にとって思想戦の対象であっただけではない。合衆国にとっては心理戦のための駆け引きの駒でもあった。さらに言えば、反共主義とレイシズムが合流する抗争の場でもあった。

6. 中国への帰還と「わたしたちの物語」

『戦争の屑』の主人公は、合衆国に渡ることなく最終的に中国へ帰還する。最後に、この結末の意味、そして、物語の宛先として述べられる「わたしたち」とは誰なのかを確認したい。ここで鍵となるのが、刺青の文字の変化である。先述のように、最初の収容所内で下腹に刻まれた刺青に、別の変化がもたらされる。身分再登録の際に釜山へと行くよう命じられたユーアーンは、もうひとりの通訳であるチャン・ミンの身分証を自分のものだと偽って所持していた。[44] しかし、米兵との面接の際、偽証が露呈することを恐れ、仲間を裏切って台湾行きを申告する。そして、収容所があった済州島に送られる。ユーアーンは国民党の設立した「反共・対ロシア委員会」（Oppose Communism Resist Russia Association, OCRRA） なる組織において自己批判を行う（これは実在した組織である）。[45] そして、38度線へと送られ、中国の代表団と面談し、最終的な第三国（台湾）行きの意志を確認する。しかし、自分の許嫁と両親が祖国で裏切り者として一生扱われることに恐怖を覚えたユーアーンは、一転、祖国中国への帰還を選択する。そして、医者に依頼し、“FUCK COMMUNISM” という刺青を、“FUCK...U..S.” と書き換える（341）。この変化を“U.S.” すなわち「合衆国」であるのみならず、“US”「わたしたち」でもあると読み換えることで、作品のイデオロギーや語りの宛先を多義的に解釈する余地が生まれる。[46] 小説の最後では、友人の将校や兵士たちが退役軍人として報われない余生を送るさまについて簡単に触れられるが、そこで主人公は、ペイに「わたしたちの物語を書いてくれ」と遺言を託

される（349）。

小説の冒頭および結末において、この刺青が「無垢な民」としての主人公の命運をふちどることになる。冒頭では、“FUCK...U..S.”なる刺青が主人公にとって、合衆国へ渡る許可を中国当局から容易に得るために必要な証拠である反面、合衆国においては、入国拒否の可能性へと反転する。

> 二週間前にアトランタで税関を通過しようとしていたとき、罠にかかった鳩のように心臓がどきどきして、しゃがれ声で陽気な声をした職員に何か疑いをかけられるんじゃないかと思った。部屋に連れて行かれて、服を脱ぐよう命じられるかもしれない。刺青のせいで、合衆国への入国を拒否されるかもしれないのだ。（3）

結末で、主人公はこの刺青を手術によって取り除こうとする。その後、主人公は以下のように物語を終える。「だが、これを「わたしたちの物語」である、ととらないでほしい。心の底から、かれらのひとりとなったことなどないのだから。わたしはただ経験したことを書いただけなのだ」（350）。確かに、ここに表れているのは、集団的な可能性の拒否に基づく個人主義的な選択であるようにも思える。[47]

とはいえ、「わたしたちの物語」を拒否することが、「わたしたちの物語」を書くことや記憶することの拒否ではないことに注意したい。帰還後、ユーアーンのもとに、かつての同僚で失業中のミンが仕事を求めてたずねてくる。だが、職を斡旋できずに帰してしまう。しばらくのちに、ミンが命を落としたことを知ったユーアーンは泣き崩れる（346）。ペイは自身の暗い運命が落とす影に沈むように、息子が結婚をしないことに気を病み、癌で亡くなってしまう（349）。反対に、主人公ユーアーンは、「他の帰還者と比べて、あらゆる点で非常に幸運である」（347）。復員後、語学能力を生かして、中学校教師として生きてきたからだ。文革の際も、語学力によって命拾いをした（346–347）。英語の運用能力が収容所で彼を生き延びさせたように、帰還後も彼の運命を救うのは語学力なのである。

冷戦構造の形式的な終焉をなぞるようにして、主人公は刺青を体から除去するという決断をする。ペシミスティックにも思える忘却の身振りが、朝鮮戦争における捕虜であった中国人民志願兵の記憶について「回想録」を書くという行為に重なる。読者にとっては、刺青を除去する身振りは、作中でのもうひとつの場面と重なる。先述のような、国民党将校が、本国送還を望んだ人民志願兵の皮膚の肉をナイフで削り取り、火で炙り、自らの口に入れるという場面である（111–112）。以上のふたつの場面が重なることで、語り手の意志をはなれて、「わたしたち」をめぐるアイロニーがある。ひとつは、「わたしたちの物語」がすでに語られてしまっているというアイロニーである。もうひとつは、主人公自身の立ち位置をめぐる、反省的視点である。「心の底から、かれらのひとりとなったことなどない」という言い方に込められているのは、仲間を切り捨てる所作であるよりも、かつての仲間たちよりも十分に成功した生活を送ることができてしまっているという後ろめたさのようなものである。すなわち、帰還後に悲惨な生を送ったかつての仲間たちのことを語る資格がないということでもあるのだ。

7. おわりに ——来るべき非同盟に向けて

歴史家のモニカ・キムによれば、朝鮮戦争時の捕虜とその本国送還をめぐる議論は、「同意を調達する場」であり、それ自体、「「自由」と「隷属」のあいだの分割についての問題」なのである。[48] だとするならば、『戦争の屑』の末尾で描かれる上記のような二重のアイロニーは、「非強制的」本国送還という事象において焦点となっていた「自由」や「意志」といったものが、捕虜た

ちにとってはあらかじめ奪われたものにすぎないという事実をあらためて浮かび上がらせる。もちろん、収容所という閉鎖空間に加え、外交的事情に拘束された状態において、捕虜たちの意志は、もはや読むことでしか表れることがない。そのような行為でさえ、合衆国による朝鮮戦争を道義的に正当化してきたような、「普遍的でリベラルな個人」というモデルのもとでのみ、許される。[49]

本稿で議論してきたように、主人公をはじめとする人民志願兵が『アンクル・トムの小屋』に描かれた奴隷制度からの逃亡や反奴隷制を描いた映画に託した期待は、小説内で彼らがじかに触れ合う黒人兵によって、確かな応答としてもたらされることはない。ただし、『戦争の屑』で描かれる主要な出来事と同時代に、ロブスンやデュボイスのようなアフリカ系アメリカ人の知識人は、朝鮮戦争をアメリカの第三世界への侵略であると定義し、他の反植民地闘争と連続した事態として把握した。このように小説内の出来事を歴史との往還の中で考えるとき、支配への協力者としての通訳という主人公の立場を通して見えてくるのは、個人主義的な願望を吸収することになった英語という言語の政治性であり、きわめてアイロニカルなものとしてしか現れない「わたしたち」にかろうじて確認することのできる、集団性の残滓である。

この集団性は、バンドン会議以後に現実のものとなった第三世界主義、それに、バンドンで謳われた反人種差別・反植民地主義の国際的枠組みの形成とはほど遠い。朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国がバンドン会議で招かれなかった理由も、朝鮮戦争の爪痕から回復をしていない、ということが理由であった。ただし、徹底した敵味方の分断線、日本からアメリカへと続く帝国主義的統治、これらが支える実質的な軍事占領体制の継続および強化のなかで、かろうじて被抑圧民族同士の共通項の探究がなされえたとするならば、『戦争の屑』には、つながりの予兆のようなものが不完全ながらも書き込まれていると言える。

註

(1) W. E. B. Du Bois, “Statement on the Korean War.” October 3, 1950. A letter to Arthur Schutzer, Executive Secretary of the American Labor Party. W. E. B. Du Bois Papers (MS 312). Special Collections and University Archives, University of Massachusetts Amherst Libraries.〈https://credo.library.umass.edu/view/full/mums312-b127-i085〉(2021年10月19日閲覧)

(2) Ha Jin, *War Trash,* London: Penguin Books, 2005, p.78. 以後、同作品からの引用は、本文中に挿入し、丸カッコ内にページ数を示す。なお、中国語の人名表記については李海燕氏にご教示いただいた。示して感謝する。

(3) ジョン・フランケンハイマー監督『影なき狙撃者』(1962)は、「朝鮮戦争で共産主義に洗脳された米兵捕虜」というイメージ作成に寄与した。朝鮮人民軍の捕虜の命運を描いた小説に崔仁勲『広場』(朝鮮語初版1961年、吉川凪訳、クオン、2019年)がある。*War Trash*との比較については、以下を参照。鄭百秀「国家暴力への抵抗:『広場』(崔仁勲、一九六〇)、War Trash (Ha Jin, 2004)」『櫻美林世界文学』16号(2020), 3–20頁。

(4) ハ・ジンは、朝鮮戦争で捕虜となった人民志願兵の回想録の著者から盗用を指摘されたが、盗用ではないと反論している(Xie Xinqiu, “*War Trash*: War Memoir as “False Document.”” *Amerasia Journal*, 38.2 [2012]: 35–42)。

(5) たとえば、『影なき狙撃者』のリメイクであるジョナサン・デミ監督『クライシス・オブ・アメリカ』(2004)、クリント・イーストウッド監督『グラン・トリノ』(2008)、トニ・モリスンの小説『ホーム』(2012)。

(6) Hilary Rodham Clinton, Secretary of State, “America’s Pacific Century.” November 10, 2011.〈https://2009-2017.state.gov/secretary/20092013clinton/rm/2011/11/176999.htm〉(2021年10月13日閲覧)

(7) Russel Banks, “View From the Prison Camp.” *The New York Times,* October 10, 2004; Darragh Johnson, “*War Trash* Wins Ha Jin 2nd PEN/Faulkner Award.” *The Washington Post,* March 24, 2005.

(8) Joseph Darda, “The Literary Afterlife of the Korean War.” *American Literature* 87.1(2015): 87–95.

(9) Jodi Kim, “Settler Modernity’s Spatial Exceptions: The US POW Camp, Metapolitical Authority, and Ha Jin’s *War Trash*.” *American Quarterly* 69.3 (2017): 570; Sunny Xiang, “Race, Tone, and Ha Jin’s “Documentary Manner.”” *Comparative Literature* 70.1 (2018): 72–92; A. J. Yumi Lee, “Cold War Erasures and the Asian American Immigrant Family in Ha Jin’s *War Trash*.” *Verge: Studies in Global Asias* 5.2 (2019): 114–131.

(10) 朝鮮戦争時の捕虜の送還先として第三国という選択肢が設けられていたこと、さらに、インド軍が捕虜

自身の選択決定に立ち合う役割であったことが、「非同盟的」な契機であるとする解釈については、以下を参照のこと。Lee, “Cold War Erasures,” p.121; Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2019, p.27. 歴史家の金東椿は、朝鮮戦争を「米国が第三世界の内戦に初めて介入した戦争」であると位置付けている（『朝鮮戦争の社会史――避難・占領・虐殺』金美恵／崔真碩／崔徳孝／趙慶喜／鄭栄桓訳、平凡社、2008年、12頁）。

(11) Vijay Prashad, *The Darker Nations: The People's History of the Third World*. New York: New Press, 2007, p.12, 15.［『褐色の世界史――第三世界とはなにか』粟飯原文子訳、水声社、2013年、31、34頁］

(12) 1952年までに、巨済島の捕虜の数は17万人にのぼったと言われる。そのうち、中国の人民志願兵が約2万1千人、朝鮮民主主義人民共和国の兵士は約10万人、大韓民国の兵士（戦争初期に共和国軍に捕らえられた）はおよそ4万9千人と言われている（Charles S. Young, *Name, Rank & Serial Number: Exploiting Korean POWs at Home and Abroad*. Oxford: Oxford University Press, 2014, p.33, 35, 68; Jodi Kim, “Settler Modernity's Spatial Exceptions,” pp.585–586, n.8）。

(13) *Young, Name, Rank & Serial Number,* p.42.

(14) Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War ,Volume II: The Roaring of the Cataract, 1947–1950*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1990, p.739.［『朝鮮戦争の起源2、1947年–1950年「革命的」内戦とアメリカの覇権』下、鄭敬謨／林哲／山岡由美訳、明石書店、2012年、839頁］

(15) Young, *Name, Rank & Serial Number*, p.35.

(16) Jessica Keener, “On Language and Embracing Failure as a Writer: An Interview with Ha Jin.” *Agni Online,* published in January 30 2018.〈https://agnionline.bu.edu/interview/on-language-and-embracing-failure-as-a-writer-an-interview-with-ha-jin〉（2021年9月22日閲覧）

(17) Cumings, *The Origins of the Korean War ,Volume II,* p.766.［『朝鮮戦争の起源2』868頁］

(18) Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* p.17.

(19) Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* p.76.

(20) Young, *Name, Rank & Serial Number,* pp.6–7.

(21) Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* pp.56–69.

(22) 以下のとりわけ21項を参照のこと。“National Security Council Report, NSC 81/1, “United States Courses of Action with Respect to Korea.”” September 09, 1950, History and Public Policy Program Digital Archive, Truman Presidential Museum and Library.〈https://digitalarchive.wilsoncenter.org/document/116194〉（2021年10月30日閲覧）

(23) Tal Tovy, “Manifest Destiny in POW Camps: The U.S. Army Reeducation Program During the Korean War.” *The Historian,* 73.3 (2011): 504–506, and 512.

(24) 大村収容所については朴正功『大村収容所』（京都大学出版会、1969年）及びTessa Morris-Suzuki, *Borderline Japan: Foreigners and Frontier Controls in the Postwar Era*. Cambridge: Cambeidge University Press, 2010, pp.147–167を参照。

(25) John Halliday and Bruce Cumings, *Korea: The Unknown War*. New York: Penguin, 1990, pp.174–179.［ブルース・カミングス、ジョン・ハリデイ『朝鮮戦争――内戦と干渉』清水知久訳、岩波書店、1990年、194–199頁］

(26) 詩人の金洙暎（キム・スヨン）は巨済島に収容された経験があり、米軍の通訳として働いていた。「祖国に帰還された傷病捕虜同志たちに」には、その経験が部分的に反映されている（『金洙暎　全詩集』韓龍茂／尹大辰訳、彩流社、2009年、50–57頁）。

(27) Serk-Bae Suh, *Treacherous Translation: Culture, Nationalism, and Colonialism in Korea and Japan from the 1910s to the 1960s*. California, CA: University of California Press, 2013, p.1.

(28) Bruce Cumings, *The Origins of the Korean War ,Volume I: The Liberation and the Emergence of Separate Regimes, 1945–1947*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1981, p.42.［『朝鮮戦争の起源1, 1945–1946年　解放と南北分断体制の出現』鄭敬謨／林哲／加地永都子訳、明石書店、2012年、64頁］

(29) Suh, *Treacherous Translation,* p.1; 山田寛人『植民地朝鮮における朝鮮語奨励政策――朝鮮語を学んだ日本人』不二出版、2004年、150頁。

(30) 金史良「草深し」『金史良全集I』河出書房新社、1973年、147–169頁。Serk-Bae Suhは「草深し」を、中島敦「巡査の居る風景」(1929)、中西伊之助「不逞鮮人」(1922)における通訳の描写と比較している（*Treacherous Translation,* pp.1–8）。「草深し」における翻訳の問題についての詳細な読解は以下。郭炯徳「金史良作「草深し」における「異言語」の絶え間――「翻訳」された植民地奥地紀行」『文藝と批評』11巻8号、2013年、109–120頁。

(31) 金石範「鴉の死」『金石範作品集1』平凡社、2005年、5–156頁。呉世宗は、丁基俊の立ち位置を、作者金石範の言語観「日本語的な朝鮮語」が反映された「境界線上にある人物」であると評している（「はざまからまなざす――金石範「鴉の死」における主体・状況・言語そして動物」『言語社会』14号、2020年、151頁）。

(32) Bruce Cumings, *The Korean War: A History*. New York: Modern Library, 2011, pp.110–111.［『朝鮮戦争論―忘れられたジェ

ノサイド』栗原泉／山岡由美訳、明石書店、2014年、134頁］

(33) Cumings, *The Origins of the Korean War, Volume I*, p.175–176.［カミングス『朝鮮戦争の起源1』204頁］

(34) 鄭百秀「国家暴力への抵抗」7頁。主人公ユーアーンの英語についての考え方は作者の考え方とそれほど遠くない。Steven G. Yaoは、ハ・ジンの詩作品を分析しながら、「文化表現の普遍的な媒体として、英語への信念を無批判に受け入れている」と批判する（"A Voice from China: Ha Jin and the Cultural Politics of Anti-Socialist Realism." *Foreign Accents: Chinese American Verse From Exclusion to Postethnicity.* Oxford: Oxford University Press, 2010, p.120）。

(35) Tovy, "Manifest Destiny in POW Camps," 519–523.

(36) 同書の時代背景や簡潔な批評史については以下。Jean Fagan Yellin, "Introduction," Harriet Beecher Stowe, *Uncle Tom's Cabin*. Oxford: Oxford University Press, 1998, vii–xxii.

(37) "Negro GI's ASK: Why Are We fighting?" *Daily People's World*, July 24, 1951. 以下に言及あり。Daniel Widener, "Seoul City Sue and the Bugout Blues: Black American Narratives of the Forgotten War." Fred Ho & Bill V. Mullen, eds. *Afro Asia: Revolutionary Political and Cultural Connections between African Americans and Asian Americans*. Durham, NC: Duke University Press, 2008, pp.61–63, 75.

(38) Du Bois, "Statement on the Korean War."

(39) Paul Robeson, "Robeson Denounces Korean Intervention." *Paul Robeson Speaks: Writings, Speeches, and Interviews.*, edited by Phillip S. Foner, New York: Citadel Press, 1978, p.253.

(40) Widener, "Seoul City Sue and the Bugout Blues", p.63.

(41) 吉田裕『持たざる者たちの文学史——帝国と群衆の近代』月曜社、2021年、186–187頁；同「人種と文化をめぐる冷戦——第一回黒人作家芸術家会議のリチャード・ライトとジョージ・ラミングを中心に」『年報カルチュラル・スタディーズ』第6号、2018年、125–144頁。

(42) Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* p.25.

(43) Young, *Name, Rank & Serial Number*, p.83.

(44) 釜山にはCICの拠点があり、南朝鮮労働党の兵士やゲリラ兵についての情報を集めていた（Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* p.73）。

(45) Young, *Name, Rank & Serial Number,* p.93.

(46) Jodi Kim, "Settler Modernity's Spatial Exceptions", p.572; Daniel Kim, The *Intimacies of Conflict: Cultural Memory and the Korean War.* New York: New York University Press, 2020, p.240.

(47) Lee, "Cold War Erasures", p.122.

(48) Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* p.82–83.

(49) Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War,* p.108.